

清親

明治の浮世絵師

—— 光線画の向こうに



Kobayashi Kiyochika: A Retrospective

2016年

3月12日(土) - 4月17日(日)

前期 3月12日(土) - 3月27日(日) / 後期 3月29日(火) - 4月17日(日)

主催 町田市立国際版画美術館

展覧会概要

ガス灯が並ぶ文明開化の街並みから日清・日露戦争まで、“明治”を描いた浮世絵師、小林清親（1847-1915）。2015年には没後100年を向かえ、改めて注目が集まっています。

清親は弘化4年（1847）、江戸本所御蔵屋敷に下級役人の子として生まれました。青年期には幕臣として伏見の戦いに参戦し、動乱の幕末期を経験します。幕府崩壊後は住居や職業を転々としませんが、幼い頃より好きだった錦絵に生活の道を見出しました。明治9年（1876）、新しい東京の風景を叙情的に描き出した『東京名所図』シリーズを刊行。季節や天候の繊細な移ろいを、光と影の巧みな表現で写したこの風景画は「光線画」と呼ばれ、浮世絵界に新たな風を吹き込みました。

明治14年（1881）を最後に『東京名所図』の制作から離れると、自由民権運動の気運高まるなか、雑誌や新聞を舞台に数々の諷刺画を描きます。また明治27年（1894）に日清戦争が勃発すると、光線画で培った光と影の表現を活かした戦争錦絵を発表。石版画や銅版画といった木版以外の版画技法にも取り組み、晩年には肉筆画も描きました。江戸期には定番だった役者や美人を主な題材とせず、社会の動きや新しいメディアと向き合い続けた清親は、浮世絵史の最後に煌いた、まさに“明治の浮世絵師”といえます。

本展覧会では、清親の多彩な画業を一堂に紹介いたします。さらには、井上安治や小倉柳村から、おぐらりゆうそん 織田一磨おだかずまに川瀬巴水かわせはすいまで、清親に共感を示した絵師の作品を交え、約300作品で清親像を多角的に辿ります。

■ 会期 2016年 3月12日(土) ~ 4月17日(日)

※会期中展示替えを行います。

前期：3月12日(土)から3月27日(日)

後期：3月29日(火)から4月17日(日)

■ 休館日 月曜日 ただし3月21日(月・振休)は開館、3月22日(火)は休館

■ 会場 町田市立国際版画美術館
〒194-0013 東京都町田市原町田4-28-1
(Tel) 042-726-2771 / (Fax) 2840
問い合わせ：町田市イベントダイヤル 042-724-5656

■ 観覧時間 [平日] 10:00~17:00 (入場は16:30まで)
[土・日・祝日] 10:00~17:30 (入場は17:00まで)

入場料

一般 800(600)円 / 大学・高校生・65歳以上 400(300)円
中学生以下は無料

* () 内は20名以上の団体料金 *3月12日(展覧会初日)は無料

* 身体障がい者手帳または愛の手帳等をお持ちの方と付き添いの方1名は半額

主催 町田市立国際版画美術館



清

きよ
ちか

親

弘化4年 (1847)	1歳	8月1日、江戸本所御蔵屋敷に生まれる。
明治1年 (1868)	22歳	幕臣として伏見の戦いに参加する。 徳川幕府崩壊後、静岡に移住。
明治7年 (1874)	28歳	上京し、画業に専念する。
明治9年 (1876)	30歳	「 光線画 」と呼ばれる東京名所図の版行を開始。 画名が高まる。
明治10年 (1877)	31歳	第一回内国勸業博覧会に「猫と提灯」を出品し好評を得る。
明治14年 (1881)	35歳	東京名所図に終止符を打ち、『 清親ぼんち 』をはじめ。
明治15年 (1882)	36歳	8月より毎号、『 团团珍聞 』に時局諷刺画を描く。
明治27年 (1894)	48歳	雑誌の挿絵 のほか、日清戦争の 戦争錦絵 を多数版行。
明治37年 (1904)	59歳	日露戦争が開戦し、再び 戦争錦絵 を描く。
大正4年 (1915)	69歳	11月28日、中里の自宅で死去。

本展の見どころ

■光線画約90点を一挙展示!!

文明開化の東京を描いた『東京名所図』シリーズから、
前期・後期あわせて92点を紹介します。

■諷刺画が勢ぞろい!!

多数の諷刺画を残した清親。鋭い表現は時に発禁処分となること
もありました。今回展示する「天福六家撰 平嶋松尾君之肖像」
「天福六家撰 田母野秀顕君之肖像」は、自由民権運動のさなかで
起きた「福島事件」を題材にして発禁となった珍しい作品です。



① 小林清親「天福六家撰 田母野秀顕君之肖像」明治16年 (1883)
大判錦絵、町田市立国際版画美術館蔵

■挿絵を多数紹介!!

清親は子ども向けの雑誌から文芸、落語雑誌、小説、労働組合の
機関紙まで、さまざまな挿絵を描きました。あまり紹介されるこ
とのない、清親の小画面の世界をお楽しみください。



② 『百花園』14号、明治22
年 (1889) 11月、個人蔵



展覧会の構成

プロローグ 新時代の胎動 — 江戸後期から明治初期にかけて

幕末から明治初期にかけて刊行された浮世絵を紹介し、清親が登場する以前の色彩や陰影表現を探ります。

江戸後期にはすでに光と影に着目した表現が用いられていましたが、文明開化を描いた浮世絵には、赤や紫を多用した鮮やかな色彩表現が大勢を占めていました。



③ 三代歌川豊国「中夏夕涼ノ圖」安政2年（1855）
大判錦絵三枚続、町田市立国際版画美術館蔵

第1章 清親登場！ — 光線画と洋風表現

清親の代名詞でもある「光線画」の全貌と、西洋の石版画の影響を色濃く示す花鳥動物画をご紹介します。朝日や夕焼けの柔らかくにうつろう光の中で、また真夜中の蛍の光とともに描かれた、味わい深い明治の東京風景をお楽しみください。



④ 小林清親「大川岸一之橋遠景」明治13年（1880）
横大判錦絵、町田市立国際版画美術館蔵



⑤ 小林清親「千ほんくい両国橋」明治13年（1880）
横大判錦絵、町田市立国際版画美術館蔵



⑥ 小林清親「カンバスに猫」明治11年-12年（1878-79）
横大判錦絵、東京国立博物館蔵 Image : TNM Image Archives



⑦ 小林清親「海運橋 第一銀行雪中」明治9年（1876）頃
横大判錦絵、町田市立国際版画美術館蔵

第2章 社会を描く—ポンチの清親

明治14年（1881）、「光線画」に終止符を打った後、清親の次なる活躍の場は、諷刺雑誌にありました。時局諷刺雑誌『团团珍聞』^{まるまるちんぶん}では、自由民権運動の高揚のなか、内閣制度や鹿鳴館外交、不景気に対する不満や不安を軽妙にあらわしました。

■「眼を廻す器械」

多忙のあまり文字通り目を回す下級官吏の姿を描いた諷刺画です。積み上げられた書類には「収税」「衛生」「徴兵簿」などの文字が記されています。当時の問題が一目で分かる、清親の諷刺画の代表作です。



⑧ 小林清親「眼を廻す器械」『团团珍聞』508号
明治18年（1885）9月5日、町田市立自由民権資料館蔵

第3章 歴史を描く—国粋主義の時代

明治初期に多くの西欧文化が流入した反動により、国粋主義が高まります。

英雄像として歴史上の人物を描いた歴史画も、人々に国民意識を抱かせるものでした。社会の求めに応じて、清親もまた多くの歴史画を描きました。



⑨ 小林清親「明智左馬之助光春湖水乗打唐崎松之図」
明治30年（1897）、大判錦絵三枚続、町田市立国際版画美術館蔵

第4章 戦争を描く—浮世絵の終焉

近代国家として日本が初めて迎えた対外戦争である日清戦争。錦絵による報道が過熱し、清親も版元の求めに応じて多くの戦争絵を描きました。清親の戦争絵には、光線画時代に培われた光と影による情景描写が発揮されています。

その後、日露戦争が開戦しますが、写真報道が一般的になっていたこともあり、戦争錦絵は影をひそめます。これを最後に、清親も版画制作から次第に離れていきます。



左：⑩ 小林清親「平壤攻撃電氣使用之図」
明治27年（1894）、大判錦絵三枚続、
神戸市立博物館蔵

右：⑪ 小林清親「日本萬歳百撰百笑 龍宮の騒ぎ」
明治27年（1894）、大判錦絵、
町田市立国際版画美術館蔵

第5章 小画面の世界—挿絵と絵葉書

明治20年代、清親は新聞や雑誌の挿絵を多く描きました。子ども向けの雑誌から文芸雑誌、労働組合の機関紙まで、清親は依頼に応じてさまざまな媒体に挿絵を寄せています。また、明治37年(1904)に妻が開いた店では清親の描いた絵葉書などを販売していました。

■ 雑誌『小国民』

『小国民』は明治期を代表する少年・少女向けの児童雑誌です。知識・歴史読物や翻訳、理科、狂言などを中心に、多色刷りの口絵や多くの挿絵を掲載しました。清親は挿絵を担当しています。



⑫ 『小国民』3年4号、明治23年(1890) 個人蔵

第6章 風景画ふたたび—新旧のはざま

光線画の制作から離れた後も、清親は風景を描いていました。『武蔵百景』シリーズでは、江戸の面影と明治の新しい景観を融合させ、光線画とは趣の異なる風景画を残しています。

清親はさらに、銅版・石版による風景画も制作しています。みずみずしい風景を捉えた写生帖とあわせて、清親が見つめた風景をご覧ください。



⑭ 小林清親「武蔵百景之内 品川見越ノ月」明治17年(1884)、大判錦絵、株式会社渡邊木版美術館蔵



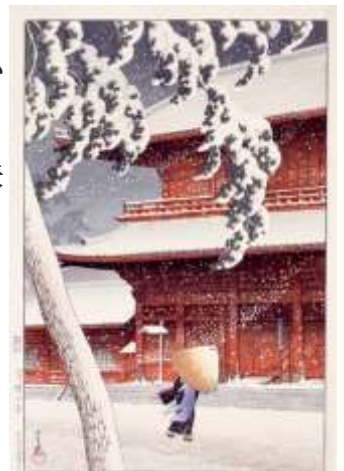
⑬ 小林清親「東京名所真景之内 如月 待乳山雪の黄昏」明治29年(1896) 大判錦絵三枚続、町田市立国際版画美術館蔵

エピローグ 清親以降—ノスタルジアの系譜

清親によって残された93点の光線画は、後世の絵師たちに少なからず影響を与えるものとなりました。本展の最後に、清親の弟子・つちやこういつ土屋光逸、都市の景観を描いた石版画家のおだかすま織田一磨、新版画を代表する絵師・かわせはすい川瀬巴水の作品を紹介します。



⑮ 織田一磨「都会夜趣 大阪松島遊郭夜景」大正8年(1919)、石版多色、町田市立国際版画美術館蔵



⑯ 川瀬巴水「東京二十景 芝増上寺」大正14年(1925)、木版多色、町田市立国際版画美術館蔵

関連イベント

※ 展覧会観覧の方が対象です。

■ 記念講演会 「開化の浮世絵師・清親を語る」

講師：酒井忠康（世田谷美術館館長）
4月3日（日）14：00から15：30 ※手話通訳付き
1階講堂 ※聴講無料

■ 美術館が寄席に！清親落語会

落語家：林家正雀
3月27日（日）14：00から15：00
1階講堂
※観覧無料
※13:00から1階受付前にて整理券をお配りします。

■ プロムナード・コンサート

演奏者：小池純子（ジャズピアニスト）
3月13日（日）①13：00から ②15：00から
（各回30分程度）
エントランスホール
※どなたでもご鑑賞いただけますがお席のご用意はありません。

■ 現代作家による公開制作

「ツツミ アスカ 時間と層の耀き」
—木版拓摺りとインクジェットプリント、古典技法と現代技法の融合—

作家：ツツミ アスカ（美術家）
3月19日（土）13：30から16：00 ※途中休憩含む
1階アトリエ ※入場無料・見学自由 ※混雑時は入室を制限する場合があります。

□ 館長によるスペシャルトーク

4月10日（日）
14：00から45分程度
※無料（要観覧券）

□ 学芸員によるギャラリートーク

3月20日（日）・4月17日（日）
14：00から45分程度
※無料（要観覧券）

同時
開催

ミニ企画展 花開く明治の版画

1月5日（火）～4月17日（日） 常設展示室 入場無料



内覧会のご案内

一般公開に先立ち、下記のとおり内覧会を開催いたします。
ご多用とは存じますが、ぜひご出席賜りますようお願い申し上げます。

報道関係の皆様のご出席をお待ちしております。

日時：2016年3月11日（金）15:00から17:00

会場：町田市立国際版画美術館



問い合わせ

町田市立国際版画美術館 〒194-0013 東京都町田市原町田4-28-1

Tel: 042-726-2771 (全般) / 0860 (学芸) Fax: 042-726-2840

担当学芸員 村瀬可奈 bunspo040@city.machida.tokyo.jp

美術館公式サイト <http://hanga-museum.jp/> ※2月上旬より展覧会特設ページを開設します。

- ・展覧会広報用に本プレスリリース掲載の画像を用意しております。
ご利用いただける際は、上記問い合わせ先までご希望の画像番号をご連絡下さい。
- ・読者・視聴者プレゼント用などに招待券・割引券をお考えの場合はご相談下さい。



 町田市立国際版画美術館

